

コンサート
あなたの街の演奏会

TOYOTA COMMUNITY CONCERT

第1380回

音で描く 心象風景

高松交響楽団

第108回定期演奏会
創立60周年記念 vol.3

TAKAMATSU
SYMPHONY
ORCHESTRA
Since 1951



海と
田園

2012 6月10日【開場13:30—開演14:00】香川県民ホール[アルファあなぶきホール] 大ホール

○主催/高松交響楽団(TSO) ○協賛/香川県トヨタ販売会社グループ・トヨタ自動車株式会社 ○協力/㈱日本アマチュアオーケストラ連盟

トヨタ自動車とトヨタ販売会社グループは、アマチュアオーケストラ活動を応援しています。

トヨタコミュニティコンサートの情報はインターネットでより詳しくご覧いただけます。 www.toyota.co.jp/tcc/

海 - 管弦楽のための3つの交響的素描 (C.ドビュッシー)

プログラムの前半では、今年生誕 150 年を迎えたフランスの作曲家ドビュッシーの名作「海」を演奏します。ドビュッシーは、同時代の同国で生まれた新しい絵画の表現手法「印象派」(作家としては C. モネ等が有名)になぞらえて、「印象派」の作曲家と呼ばれています。

さて、印象派の音楽とは何でしょう。一言で言うのはなかなか難しいですが、写真の様な写実的な物では無く「心で捉えたイメージ」を、古典派・ロマン派音楽の枠に捉われ無い「自由な形式と、大胆かつ繊細な和声とリズムで表現」したものと考えていただければ良いかと思います。何も考えずに、その響きの中に身を委ねれば、曲を聴き終わった時、ドビュッシーの、目だけではなく心で捉えた海のイメージが、心象風景として我々の心にも残る。そんな音楽ではないでしょうか。

第1楽章 「海上の夜明けから真昼まで」

薄明かりから日の出に向けての微妙な光のうつろいを響きに移し変えたような、新鮮な美しさに満ちた音楽で開始されます。その透明な明るさの次にくるのは、曇りがちでやや風のある灰色がかかった景色です。が、やがて、太陽は高くのぼり、まぶしい程に海を輝かせます。

第2楽章 「波のたわむれ」

この楽章は、この曲の白眉となる見事な音楽になっています。いろいろな楽想の織りなす響きは刻一刻と変化し、極めて繊細な色彩を見せます。曲線的な旋律もひととき印象的です。音楽は少しづつ輝きを増していきませんが、それでもときどき立ち止まると、深い色を見せるのです。

第3楽章 「風と海の対話」

低弦による、風が水面をえぐる様な描写から始まります。次第に空も暗くなって、あたかも大嵐の様になってきます。一瞬、音楽が静まり返り、夕風のような雰囲気と風と海の優しい対話が交わされますが、再び、両者は激しく主張しつつも渾然一体となってクライマックスへと向かっていきます。

交響曲第6番 へ長調「田園」 (L.v.ベートーヴェン)

この曲は、ベートーヴェンが、その自然の風景をこよなく愛していたウィーン郊外のハイリゲンシュタットで作曲されました。同時期に作曲・初演された交響曲第5番「運命」で、高い精神性を凝縮して表現したのとは対照的に、「田園」はその明るさと伸びやかさが際立っています。対照的である半面、楽器の使い方(トロンボーンとピッコロの導入)や、冒頭のリズム等、多くの共通点もみられ、「田園」と「運命」は事実上の兄弟作品となっています。

ベートーヴェンはこの曲について「単なる田園の情景の描写だけではなく、感情を表現したもの」と語っています。前半の演奏曲と表現は異なりますが、これも心象風景を音化したものといえるでしょう。

曲は5つの楽章で構成されていますが、第3楽章から終楽章までは続けて演奏されます。各楽章にはそれぞれ標題が付けられています。

第1楽章 「田舎に到着したときの晴れやかな気分」 Allegro ma non troppo

八分音符のあと、「タタタ」と入る、交響曲「運命」と同じリズムで始まります。リズムは同じですが、「運命」とは真逆に、非常に優しい響きです。明るく親しみやすい旋律によって田舎に着いた時の晴れ晴れした愉快的な気分が、快活なテーマと流麗なテーマ、2つの主題で、ソナタ形式にそって表現されます。

第2楽章 「小川のほとりの情景」 Andante molto mosso

弦楽器が、小川がそよそよと流れる情景を表現します。その中に身を置いてゆったりと安らぐベートーヴェンの姿が浮かんでくるような楽章です。終結部ではフルートでナイチンゲール、オーボエでうずら、クラリネットでカッコウの鳴き声を真似た音型も演奏されます。楽器による鳥の鳴き真似は、作曲当時としては非常に斬新だったことでしょう。

第3楽章 「農夫達の楽しい集い」 Allegro - Presto

陽気でユーモアに溢れた楽章です。最初の田舎の舞曲を思わせる歯切れの良い主題、その後のオーボエ、クラリネット、ホルンのひなびた旋律、ドとソの音だけで酔っ払いの様に合いの手を入れるファゴット、その後続く、無骨な2拍子のダンス、全てがユーモラスです。が、急に音楽は慌ただしくなり…

第4楽章 「雷雨、嵐」 Allegro

楽しい村民の集いを突然襲う激しいにわか雨の様子、そしてこの楽章だけに登場するティンパニによって、雷鳴が非常に描写的に描かれますが、次第に雷鳴は遠ざかり、雲の暮れ目から太陽の光が射ってきて…

第5楽章 「牧人の歌-嵐のあとの喜ばしい感謝に満ちた気分」 Allegretto

自然への畏敬と感謝の牧歌が感動的に演奏されます。歌う様な旋律が楽章全体に満たされています(合唱を加えて作曲する構想もあった様です)。コーダ(後奏)は終楽章の3分の1を占める長大な物ですが、いかにも全曲を終るのが名残惜しい、といった趣で、温かい幸福感に包まれながらエンディングを迎えます。